
ラクエン

花火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラクエン

【Nコード】

N4505Y

【作者名】

花火

【あらすじ】

箱庭に入れられた罪人、生きて箱庭を出たいと願う

・零（前書き）

無実の罪人は箱庭で生きる

「啼いて喚いて叫んで懇願してひれ伏せばいい」

男はそう言い、毎晩のように罪人を虐げる

虐げることどんな快楽があるのかは知らない

そもそも、虐げられる側の人間としては知りたくもない

体に鞭を打たれ、針を刺され、鈍器で殴られ…

どんなに血まみれになって泣いても、誰も助けてくれはしない

虐げる側の人間は勿論、同じ箱庭に入れている罪人達でさえ助けてくれない

助ければ自分も酷い目にあうから

結局、皆自分勝手なんだ

私をこんな箱庭に入れた奴も

1ヶ月に最低1人はここに連れて来なければ自分が罪人になるからだから私は無実の罪でここに放り投げられた道端にゴミを捨てるのと同じように

私は所詮、くずゴミのような存在だったのだろうか…？

箱庭に入れられたとき、そう思った

でも、今はそんなおめでたいこと考えてられる程余裕はない
ここに入れられたとき、私の人生は”地獄”と化した

ここは地獄

箱庭と書いて地獄と読む

そして、地獄と書いて ラクエン とも読む

いつかは、空を飛ぶ鳥のように自由になりたい

ラクエンで飼い殺されたくない

虐げられて死にたくない

とにかく、私は死にたくないのだ

生きるためにはなんだってしてやるうじやないか

殺人だって…

そして人の命を奪うことに快楽を覚えるようになったとき、私は虐げられる側の人間になる

虐げられる側の人間の苦痛を知っているからこそ、より強く虐げる鏡に映った醜い自分を粉々に砕くように…

神様がいるのであれば何回でも祈るだろう

自由になりたい

- 罪人の箱庭（前書き）

跡形もなく崩れ去った日々

取り戻すことはできるのか否か…

- 罪人の箱庭

いつも通り、私は普通に生活をしていた
そう、いつも通りに

なのに突然役人の人が来て、私を連れて行った

「あなたを連行します」

たった、その一言で…

私の人生はひっくり返ってしまたのだ

たかが国のお偉いさんの娯楽の為に、人の人生を…

「なあ、あんた、名前は？」

箱庭という名のラクエンに入れられて2カ月

私はやっと同類の人間とまともに話した

でも、今はあまり話したくない気分…

「……………」

「悪いな、俺から言うもんか」

紺色の髪をした私より年上の男の人

猫の様な八重歯をした、いかにも人懐っこそうな人間

私とは正反對な印象

「俺は結城だ」

「……………名前は？」

「さあね。俺、ここに連れてこられたときに記憶無くしたみたいで
さ」

「記憶……………か」

そんな都合のいい事があるのか

「都合いいだろ？」

なんで今考えた事分かるのか……………

「で、あんたは？」

「……………妃 利恵」

「ふうん…利恵かあ」

なんで2か月も経った今になって話しかけるのか

私たちは面倒だからという理由で同じ牢にぶち込まれていたのにだから私はこの人の事を見ていた

監督官にいつも文句を言っつては虐げられてる

にも関わらずいつもヘラヘラ笑っつては牢の中にいる人たちを笑わせ
ている

私以外は全員笑ってる

そう、私以外

何が楽しいのか…何が面白いのかが分からなくなったのだ

こんな箱の中で、馬鹿騒ぎなんかやってられない

「何か御用ですか？私、これから”あの方”の所へ行くんですけど」

「”あの方”…？」

「そうです。”あの方”です」

”あの方”とは、この箱の持ち主

つまり、虐げる側の親玉…ということだ

何故呼ばれたのかは分からないけど、行かないと絶対に殺される

「へえ…俺の知り合いで”あの方”に会った女がいるんだけど、あ

れから一度も帰ってきてねえんだ」

「殺されたんじゃないんですか？」

「おま……！！！」

「私はこういう女です」

私は結城さんに背を向け、”あの方”の下へ行く

そこでふと、結城さんに尋ねたいことが

「すみません、質問いいですか？」

「ああ…」

「あなたは何故こんな箱の中で笑っつていられるんですか？」

疑問

ギモン

分からないんです、何でこんなこんなところで笑っつてるのか

正気の沙汰とは思えない

「……馬鹿騒ぎでもしねえと、あいつら元気ださねえだろ。」

俺がやらねえとあいつらは一生日の当たらない暗闇に咲く花みたいになるだろ」

「詩人ですね　では、これ以上無駄話して遅れたら殺されるので」

「……Good luck」

「……Leave me alone」

後ろで結城さんがほくそ笑んだような気がした

……いいね、踊ってやろうか

この腐りきったラクエンで踊り狂ってやる

- 罪人の箱庭（後書き）

人間と関わるのは面倒だから

少女はそう言い人間を突き放す

- 血の掟（前書き）

ラクエンにて誓いし忠誠

血の掟となりて少女を縛る

- 血の掟

私がこのラクエンに入れられて2ヶ月
いい加減誰かが死ぬ場面を見てもいいのだろうか、未だに見たこと
がない

そんな、まだ流血沙汰に慣れていない私は日々を退屈に過ごしていた
そして今日

私はこのラクエンを仕切っている”あの方”の下へ行くことになった
できるものならこの機会にその人間を殺したいのだが、人間を殺せ
るほどの力はないし武器もない

そもそも、私ごとができるのであれば既にラクエンはないだろう

「……失礼します、妃 理恵です」

「どーぞー」

”あの方”の部屋のドアノブを握り、前に押す

半分ほど開いたところで私は身を後ろに跳ね除けた

何故かというと、理由は簡単だ

何か鋭利なものの先が、私の心臓付近に現れた

「遅れてしまったようですね」

「1分37秒遅刻だ。そこで死んでもらってもよかつたけどね」

男か…、この声は

「すみません、結城という男に話し掛けられてしまったもので」

「まあいいや。入れ」

「はい」

中に入ると、そこは一面真っ黒な部屋

家具も黒

カーテンも黒

かるうじて違う色があるというと、壁に打ち付けられた”赤”

電球の光

あとは、中にいる人

「驚いたよ、今まで遅刻した奴は全員今ので死んでただけだね。どこから来た？」

「ただの一般人ですよ。庭師の娘です」

「ふうん：大して運動神経は関係ないな」

真つ黒な綺麗な髪

黒に近い紺色の目

身につけている服も全てが黒

眼つきで人を殺せるほどに威圧感が凄い

……私はそれくらいじゃ怖気づいたりしないけど

前々から思っていたけど、こんなので怖がる人の気が知れない

こんなところで私に恐怖を与えることは絶対にできない

ラクエンでの2ヶ月

最初の1ヶ月で嫌というほど恐怖を感じてきたから

というか、こんなチンチクリンにこんな所に連れてこられたと思う

と、一発殴りたいくらいに苛々してくる

「俺はここを仕切ってる三ヶ島 錐斗だ」

「改めまして。：お初にお目にかかります、妃 理恵と申します」

何故

ナゼ

なぜ私を呼んだのか…

私は何も目立つことはしていないはずだ

それどころか、命令には何も逆らっていない

呼ばれる理由がわからない

「……」

「何で呼んだのか分からない、って顔してんな」

「……私はあなたに会いたくないから大人しく服従してきましたんです」

三ヶ島はほくそ笑んだ

なにが思い通りにいったのか…

三ヶ島は立ち上がり、私に近づいた

「妃 理恵、お前はこれからある男を探ってもらおう」

突拍子もないことを…

あまりのことに、私は目を丸くして驚いた
何故ラクエンの中の罪人を利用するのか
信用できるのだろうか

「あ、決して俺はお前を信用したわけじゃない」

「……なら途中で放棄するかも知れませんか？」

「お前にそれはできない」
成る程

さっきの言葉を私に言わせたかったからほくそ笑んだのか
その言葉の意味は、単純に言うと

”あなたに逆らうと殺されるのを知っているから犬になって服従してきた”

ということだ

「な？お前は俺に逆らえない。その命に執着しているから
命に執着しているから死にたくないと思う

これは絶対なのか

それとも……

「…分かりました。では対象は」

「……結城 隼人」

ユウキ ハヤト

あの男か

この人に目をつけられないほうがおかし

ついに”あの方”の目にとまってしまったのか

まあ、私にはどうでもいいけれども

私は、自分がラクエンから出られればそれだけでいいのだ
出るための犠牲など、知ったことではない

「承知しました」

「あいつが罪人達を引き連れて反乱を起こすようなマネをしたら報

告しろ」

「はい。では」

私は部屋を出ようと、三ヶ島に背を向けた

そして、私の背には刀が

「いいか、忘れるなよ」

狂え

クルエ

「お前は俺に逆らえない。これは掟だからな」

背をとられたという事は”死”を意味している

「お前は”血に抗えない”」

掟

オキテ

「ふっ……。分かっていきます」

ワガアルジ

「それでいい」

私はこの男に逆らえない

そういう血筋だから

血の掟は覆すことはできない

同じような血を持つ者とは、思想が同じ

だから私は、自己中心的な考えを持ち、犠牲者をなんとも思わない

屍を冒瀆するように踏み潰す

たとえそれが人間だとしても

私は人間を踏み潰す

人間は所詮ただの踏み台に過ぎない、下等な存在

でも、それは私も同じだ

踏み潰されないように踏み潰す

誰かがこういった

殺すられる前に殺れ、攻撃は最大の防御

だから、私は他人を貶める行為をして尚自分を守っている
自己防衛

だから私は自己中心的な考えをもっているのだ
自分が助かれれば、その他はどうなったってかまわない
なによりも自分が大切なのだ、私は

「では、失礼……」

「待て」

三ヶ島に呼び止められ、振り向く

すると、三ヶ島の手には小さなジャックナイフがあった

「これを持って……？」

「ああ」

渋々受け取る

……が

刹那、私の掌が切り裂かれた

「っ……！？」

「言っただろ？」 血の掟” だって」

「……分かってます。主人の前で血を流す……忠誠の証ですね」

それを物騒に言ったのが” 血の掟”

本人の明確な同意はないけど、これで任務を全うすれば私は死なず
にすむ

とても喜ばしいことじゃないか

あの男が反乱を起こすまですつと見張っておけば、いつか出られる
前に小耳にはさんだことがある

” あの方” の命令を遂行すれば出れる。だけど、失敗したり裏切っ
たりしたら最後、罪人は全員処罰される

ただし私には2番目はどうでもいい

1番目が重要だ

「……行け」

私はこぼれる血をできるだけこぼさずに部屋を出る

そして、片手には私の知で赤く怪しく光るジャックナイフを持ちな

がら

決して振り向かない

振り向いてはいけないから

過去に未練を残したままでも振り向いてはいけないから

それも淀…？

いや、これはただの自分ルールだ

過去を振り返ったところで、あるものはただの屍と墓と血とこぼれる涙だけだ

そんなの見たくない、絶対に

見ようと思えば見れるのだけど……

- 血の掟（後書き）

行き着く先には屍のみ

それを知っても尚外に出たいと願うのは何故か…

？

- What's your name? (前書き)

それは誰の名前？

それは本当に名前？

- What's your name?

千年の時を超えて、あなたに会いに行こう
この命朽ち果てるまで

あなたに会いに行くまでが私の生きる意味
存在理由

存在意義

存在証明

それ以外に私の生きる意味などないの
だから私から逃げて、

「……痛いな」

だいぶ出血がおさった手を見ながら呟いた
今まで一度も痛いなど呟いたことはないのに…

「おい、どうしたんだよその手」

結城…

こちらから接触する手間が省けたな

「……貴方が思っているとおりです」

「……”あの方”に斬られたのか」

「貴方がそう思うならそうじゃないんですか？」

無関心を装って相手のミスを突く

一度でいいからやってみたかった

「……何をしてるんですか、こんなところで」

ここは罪人が入ってきてはいけないところだ

私は今あの部屋を出たからここにいてもおかしくはない
でも、この人がいるのはおかしい

「……言わなきゃ駄目か？」

「……別にいいですけど」

探っているのがばれたらいけない

バレたら最後、私は任務失敗ということに殺される

そうしたら外に出ることなんて絶対にできない

そう

これは騙し合いだ

私と三ヶ島はグル

結城 隼人もこちらを探る

「なああなたさ、三ヶ島に俺を探れって命令されたんだろ？」

「……………」

何を言っているのだこの男は

しかし、驚きは顔に出さない

驚いたときの手癖も今は抑えている

バレないだろう

「どうしてそう思うの？」

「だってさ、今まで頑なに誰とも話してなかったのにさっき話したばかりの俺とこんなに話すなんて、

俺を探るほかにないだろ常識的に考えて」

「私は貴方の考える常識は知りません」

そう言い、結城 隼人に背を向けてその場を去ろうとした

しかし、腕をつかまれた

「何ですか、放してください」

「いやだね」

いつものヘラヘラしたあの笑み

見るだけで苛々してくる

私の前で誰も笑うな

それが私の願いだ

笑うことのできない私の醜い嫉妬

作り笑いさえできない私の卑しい願望

笑うな

笑うな

「私を笑うな」

「っ!？」

ジャックナイフを取り出して結城の腕を少し斬る

「嘲笑うな…私を見て笑うな」

何が起きたのか分からないような、キョトンとした表情になる結城
そして、プッと吹き出した

笑うなと言った先から笑ってるし…

「笑うなと言った筈なんですけど」

「悪い悪い。あんたがそんな顔でできるなんて思ってもみなかったから」

顔…？

表情のことか？

でも、いつもと同じ無表情の筈なんだけど…

「怒ってる」？

「…はあ!？」

怒ってる？

この私が…

今までずっと感情を必死に隠してきて能面のように表情が崩れなかった私が

初めてこんな男の前で怒った…？

ありえない

「そんなことはありえない 私は一度も表情を変えたとは思っていない」

「いや、現に今怒ってたし 表情豹変」

「…信じませんから、絶対に」

こんな男の言葉なんて何一つ信じちゃいけない

「貴方の言葉なんて」

「冷たいな」

「信じませんよ、結城 隼人」

「…!？」

結城 隼人は驚いたように目を見開く

フルネームを知っているだけでこんなに驚くものなのだろうか

だって、自分の名前を知らないなんてただの冗談…嘘の筈なのに

「何で……知って」

「失礼します 仕事に帰るので」

「ちよっ……！待てって！！！」

結城 隼人の手を振り払い、走って箱庭の中へと戻った

その後を追いかける足音一つ

どうしてそこまでして追いかける…？

名前

ナマエ

名前を知らないというのは本当なのだろうか

だったらこれは、結城 隼人を探るいい機会だろう

私は立ち止り、振り向く

僅かの間で走っていた

最初ももっと差があった筈だからあと少しで追いつかれるところだ

ったということか

「……どうしてそこまで名前に執着するの」

「…執着じゃない 俺は、失った自分の名前を知りたいだけだ」

「名前を知らないというのは本当だったんですか…？」

「当たり前だ」

俺は、名前を知らない

- What's your name? (後書き)

誰が為の存在か

失ったのは名前だけではなく、記憶もか…？

- Which is the truth? (前書き)

失ったものを探す少年

願いを叶えようとする少女

- Which is the truth?

いつ、どこで、誰が、嘘を吐いた…… ?

騙し合い

ダマシアイ

私は一体どちらの見方をすべき？

三ヶ島 錐斗の見方をすれば、ラクエンから出られる

しかし、そうしたら似た境遇の結城 隼人を見捨てることになる

でも、結城 隼人に見方をしたら、反乱して三ヶ島を殺すしか出る

方法はない

三ヶ島のあの冷酷さ……

あれに太刀打ちできるのはいるのだろうか

あの部屋に打ち付けられた”赤”

あれは紛れもない人間の粉碎死体だった

あんなものを自室に飾っておく人間は異常だ

そして、人間をあんな風に殺せるほどの力を持っているとなると、

私では絶対に敵わない

奇襲か騙まし討ち、その他はない

成功する確証はない

どちらかといえば、失敗する確率のほうが高いだろう

そんな大博打に出るくらいなら、三ヶ島の犬になるか……

「……お前も、ここにいれられるときに何かを失ったはずだ」

ここにいる全員は、何かしら失っている

結城 隼人は名前を

結城 隼人の友人、前園 翔馬という少年は最愛の人との記憶

もう1人の友人、赤城 深冬は片目の視力を

そして私は……

「……記憶。ラクエンにいれられる当日より前の記憶が何も無い」

「あんたは記憶、翔馬も記憶、俺は名前で深冬は視力か…」
視力を失った赤城 深冬という少女が気になる…

いつ、どこで、誰に、どのようにして奪われたのか
それを知ることができれば、三ヶ島の”真実”に近づくことができる
そうしたらこのラクエンを破壊し、無実の罪人を解放する

……………チヨット待テ

なんでそんなことをする必要がある？

リスクの高い賭けをするよりか、ただ犬になって服従すれば楽だろ
うに

そもそも、私は人助けをする人間だったか？

分からない

ワカラナイ

記憶がない私には、私がどんな人間だったかも分からない
帰るべき場所も分からない

何もかも分からない

それに、これは騙し合いだ

騙すべき相手を助けるなんて笑止千万

でも、助ける振りをして結城 隼人を探れば……

「……………私は」

「騙したければ騙せばいい」

ハツと息を呑んだ

そうだ、この人は私がどんな目的でこんな話をしているのかを知っ
ている

いまさらバレるだのバレないだの、どうでもいいことなのだ

既にバレているから

「だけど、俺はあんたを騙す。そもそもって三ヶ島の野郎ぶっ飛ば
してここから出る」

結城 隼人は鋭い眼つきで遠くのほうを見た

その先には何が見えているのだろうか

「……………その間に、あんたも考えが変わるだろうよ」

「……………」

「俺はあいつらを救ってあんたも救う」

さしずめ、英雄になりたいというところか

「ただの妄想に聞こえるかも知れねえけど、俺は今……………」

その先の言葉

それを聞いて三ヶ島に教えればここから出られる

他人に情が沸く前に早くここを出なければ……………！

「……………そこまでだ」

「え……………」

なんで一番重要なところだけ言わない……………

その他の会話なんてなんの意味もなさいのに

結城 隼人の方を見ると、悪戯な笑みを浮かべている

そして、自分の唇に人差し指をつけて……………

「あんたはまだ信用できないからな、ここまでしかいわねえ」

「……………それならいいです。さようなら」

この場を立ち去ろうと歩き出す

が、また腕をつかまれた

「なんですか」と、少し投げやりに問いかけながら後ろを向く

刹那

唇が触れ合った

「な……………っ！！!?」

「可愛い子にこんな物騒なことなんてできねえよ。諦めて寝返った

らどうだ？」

声のトーンが低く、この男の声なのが分からない

私は結城 隼人の胸を思い切りつき離し、走って去っていった

「つてて……………」

残った男、結城 隼人

彼はまた笑みを浮かべた

「相変わらず」素直じゃねえな…、
「理恵」

- Which is the truth? (後書き)

記憶を失った少女を知る少年

彼は少女にどんな感情を抱いているのか…？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4505y/>

ラクエン

2011年12月9日23時51分発行